

調査報告

南米ボリビアに関する現地調査およびリモート調査の報告

梅崎 かほり

アジア研究センターには、2018年度から共同研究「植民地国家と近代性:アジア諸国を中心とする比較研究」でお世話になっている。タイトルの通り、アジアを中心とする共同研究グループにありながら、私は南米ボリビアを専門としている。アジア諸国とは植民地化された時期も期間も、また独立の時期も経緯も異なるラテンアメリカを、アジア研究との比較対象として加えていただいた形だ。アジアについては不勉強な私にとって、定期的で開催される研究会は大変刺激的である。この場を借りて御礼申し上げたい。

私は2003年より、ボリビアのラパス県で現地調査を繰り返し、ボリビアにおける非先住民マイノリティ、アフロ系ボリビア人について研究してきた。彼らは、植民地時代後期に奴隷としてこの地域に動員されたアフリカ人の子孫で、白人主導の混血国家の形成過程において、その存在が不可視化されてきたマイノリティ集団である。先住民運動が盛り上がりを見せた1970年代を経て、1990年代に多文化主義を標榜する政権が登場する中、アフロ系ボリビア人たちもまた、被抑圧者としての歴史的立場からの脱却と、固有文化の復興と集団的アイデンティティの確立へ向けて動き出した。その一連の社会運動が私の研究テーマである。近年では、史上初の先住民大統領として脚

光を浴びたエボ・モラレスの多民族国家構想と、アフロ系ボリビア人の社会運動との関連性に注目してきた(梅崎2018)。

2018年度以降の現地調査で行ったことは、主に以下の3つである。1つは、ラパス県におけるアフロボリビア社会の継続的観察。もう1つは、新しい研究テーマとして準備を進めている都市先住民のライフヒストリー研究の予備調査。加えて、2019年度大統領選挙およびモラレス政権の終焉をめぐる世論の調査である。

アフロボリビア研究には2017年の博士論文でひと区切りがついたが、これまで聞き取りをおこなってきた個人や社会組織を対象に、追跡調査を継続している。2019年2月の調査の際には、自身もアフロ系ボリビア人である歴史家アンゴラ氏の出身地、北ユンガス地方コリパタ区に同行し、同地域で収集されたオーラル史料と、それに基づき再現された保存食の加工過程を見せてもらった。また、同氏が地域史を語るラジオ番組の収録に参加し、オーラルヒストリー研究の成果を地域に還元する方法について議論した。ラパス市では、県が開催したアフロボリビア文化の保存に関する聴聞会に同席し、固有文化の保存と継承の重要性について当事者たちがどのように考えているか、またそこに行政がどのように関わっていくべきかの議論に立ち会わせてもらった(写真1)。

新しい研究テーマは、アフロボリビア研究で明らかになった都市・農村間の連帯と分断の問題を掘り下げるための比較研究として着想したものである。そもそも私がボリビア研究を始めた当初は、都市先住民の生活文化の重層性に関心を抱き、コチャバンバ県でケチュア語(アンデス地域で最大規模の



写真1 アフロボリビア文化の保存に関する聴聞会の様子

話者数を有する先住民言語)を学んでいた。そこで、2018年以降は徐々にケチュア語圏での調査研究に軸足を戻し、コチャバンバ市に暮らす農村出身の女性インフォーマントを対象としたライフストーリーの聞き取りを始めた。知り合って20年となる彼女は、コチャバンバ市内最大の市場に伝統織物と民芸品の店を構え(写真2)、頻繁に出身村との行き来を繰り返しながら生活を営む、ケチュア語・スペイン語バイリンガルの先住民である。政治的にも経済的にも変化が大きく、都市中心の社会が確立されていく80年代以降のボリビアを、1人の先住民女性の視点から見つめ直し、現代ボリビアにおける先住民アイデンティティの動態を描き出すことができれば、共同研究「植民地国家と近代性」にも何かしら新しい貢献ができるのではないかと考えている。2019年・2020年の現地調査時には、市場で一緒に店番をしながら、卸売りや周囲の売り子とのケチュア語でのやり取り、客とのスペイン語のやり取りを眺め、手の空いた時間に語ってくれる村の話、家族の話を記録することを繰り返した。次の渡航時には、いよいよ村に連れて行ってくれることになっている。

このようなフィールドワークを進める中で、否応なく調査の対象となったのが、今まさに激動のさなかにあるボリビアの政治状況である。前述のモラレス大統領が4選をかけて再出馬した2019年10月の大統領選挙をはさみ、ボリビアの政情不安は顕著となった。

直前の8月の現地調査では、与党MAS(社会主義運動党)の選挙集会をバックステージから観察する機会を得た。「脱植民地化」を掲げたモラレス政権は、2006年の発足後より高い支持率を保ちつつ3期14年間続いたが、3期目に入る頃からは、長期政権化への警戒と強権的な政治手法から離反する者も増えてきた。世論が割れる中での選挙集会であったが、地方からも支持者が押し寄せ、改革の続行が不可欠だと弁をふるう大統領の演説は数万人の熱気に包まれた(写真3)。結果、次点に10ポイント以上の差をつけ

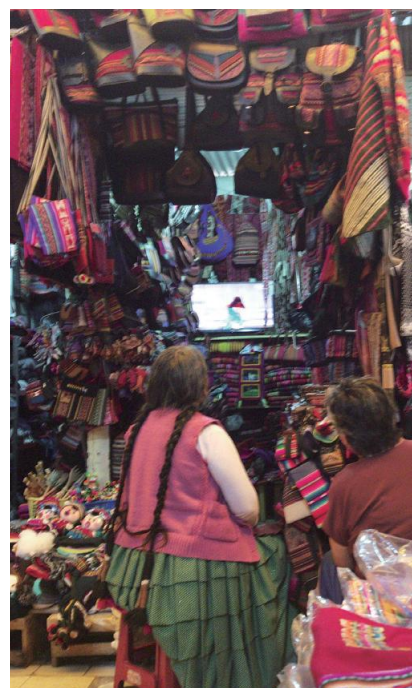


写真2 伝統織物でカラフルな市場の一角



写真3 (左) 演説するモラレス大統領(2019年8月) (右) 会場の外まで何万人もの人で埋め尽くされた

て勝利したものの、開票中の選挙不正が取り沙汰されたことから、市民の抗議行動が各地で暴徒化する。最終的に軍にも見放されたモラレスは、即時辞任のち亡命を余儀なくされた。8月の滞在時には想像もつかなかったことである。

この際、副大統領ほか上院議長・下院議長などが一斉にその座を追われ、混乱の中、半ば強引な形で、モラレスと敵対する右派の暫定政権が発足した。一連の政変をめぐる世論は二極化し、モラレス支持派と反対派の対立が表面化すると、度重なる衝突により治安は目に見えて悪化した。この頃私は日本にいたが、友人知人の身にも危険が迫る事態に、夜な夜な報道とSNSを通じて現地調査しながらに最新状況を追った。メッセージアプリでは生々しいやり取りが飛び交う。「玄関先まで暴徒が来ている！怖い！」「火を投げ込まれるぞ！バケツに水を！」「女性は武器になるものを持って！」といった具合である。ある夜には、近隣住民で組織したという自警団の様子が動画で送られてきた。フェイクニュースが溢れ、情報が錯綜する中、モラレス支持派のインフォーマントは「思想統制が始まり監視されている」と怯え、反対派の友人たちは「MAS支持者に襲われる」と不安を口にする。再選挙の見通しが立つまでの2か月間、経済活動も停止した。

2020年3月の下旬、ようやく社会に平常に戻った矢先、ボリビアにもコロナ禍が到来する。5月に予定されていた再選挙は、延期、延期を繰り返し、つい先日、

10月18日に実施された(写真4)。まだ本開票は終わっていないが、速報では、モラレス政権で経済・財務相を努めたMASの候補者アルセが過半数の得票を得て、当選確実と報じられた。支持者の層は厚かったものの、あれほどの混乱を引き起こした前与党が大差を付けて当選とは。ボリビア国内からも驚きと期待と疑念の入り混じった声が聞こえてくる。捉えようによっては、ボリビア国民はもとよりモラレスを選んでいたのではなく、政党の方向性を選んでいたのだという解釈も可能だろうか。この選挙結果でボリビア社会はまた一步「脱植民地化」に近づけるだろうか。コロナ禍の間はオンラインで、明ければまた現地調査を再開して、今後も注視していきたい。

(所員 神奈川大学 外国語学部准教授)

参考

梅崎かほり(2018)「ボリビア「複数ネーション国家」の展望—アフロ系ボリビア人の事例から」永野善子編『帝国とナショナリズムの言説空間—国際比較と相互連携』御茶ノ水書房。



写真4 (左) コチャバンバ県農村部の投票所の様子 (中) 投票用紙には候補者の顔写真が並び (右) コロナ対策に設置された仮設手洗い場